THE DAILY ENGINEERING & CONSTRUCTION NEWS
日刊 建設工業新聞
2018年（平成30年）3月6日 火曜日
第19379号

発行所 日刊建設工業新聞社
〒105－0021 東京都港区東新橋２－２－10
電話03（3433）7151 http://www.decn.co.jp/
©日刊建設工業新聞社 2018
記事 電話03－3433－7161 mail-ed@decn.co.jp
購読 電話03－3433－7152 mail-sa@decn.co.jp
広告 電話03－3433－7154 eigyo@decn.co.jp

明治維新150年と治水の歴史

竹林征三

〈1〉江戸幕府治水政策の本質

技術の歴史は失敗と事故の反省と克服によって進歩してきた。だが治水の失敗と事故についてはほとんど書き残されてこなかった。治水史というのは世にも不思議な技術の歴史である。失敗と事故から学んだ面は進歩し、気づかない面は事故と失敗を繰り返してきたと言えよう。

今年は明治維新150年の記念する年であるとともに、戦後約４分の３世紀（明治維新から約半分）の節目の時である。日本は維新後も戦後も利便性を追求し、効率一辺倒で突き進んできた。その道は過去の価値観から脱却・決別し、欧米崇拝と追随から始まった。先人の知恵の切り捨てから欧米追随を経て独自技術の確立への道でもあった。

現在はいろいろな戦争のただ中にいる。経済戦争、軍拡戦争、人工知能（ＡＩ）情報戦争、技術革新など、すさまじい熾烈（しれつ）な戦争競争の最中である。その中でも歴史認識戦争が極めて重要ではないかと考える。

これまでの一面的な見方の歴史がいろいろな面からの見直しを求められてきている。巨大災害の世紀に突入して、これまでなかった災害が次々起こる現在、東日本大震災で地震学の権威筋が「科学の敗北」などと言っていてよいのだろうか。治水の歴史についてもこれまでの技術発展礼賛史観と違う、見落とされてきた失敗事故の面から考え直さなければいけない。

日本の治水史は仁徳天皇の茨田の堤から始まり、明治以前も明治維新以降も大変苦い失敗と事故の克服の歴史であった。150年の治水の失敗の歴史から学ばなければならないことがあまりにも多い。

明治維新で治水の何が変わったのかを考える場合、江戸徳川幕府の治水政策は、どのようなものだったのかその本質をまず考えてみることから始める必要がある。徳川幕府の地方統治政策の基本は、幕府への貢献度と忠誠度によって大藩から小藩まで細かく分け与えて統治させた。失政すれば御国替えさせられた。その基本は領地の石高であり、好きなように、切り売りのようにして領地は細かく分割した。その結果、治水政策に大きな影響を与えた。堤防を触ることは現在も昔も御上の許可が必要である。

江戸時代は小さく領地が分割されており、堤防をより高く安全にしたいとする工事は、その上・下流がより危険になるということで反対した。左岸が良くしようとすれば右岸が反対となり、治水の要請はいくらあっても藩が違う、領主が別といったようにバラバラで結集できなかった。

左右岸がともに良くなる治水策を立案することを阻む最大の障害は、細分化された領地政策にあった。藩や領地は、年貢高の微妙な差異を付けることにより幕府への忠誠度を評価し、その論功行賞により領地を与える幕府の大名統治政策にあった。それでは幕府により与えられた領地内のことしか考えられず、隣の領地のことなどとは調整が取れない。

現在アメリカ・ファースト政策や都民ファースト等地域第一主義がもてはやされている。全く同じことである。隣接するところのことはお構いなしの政策にならざるを得ない。

〈参考文献・『物語日本の治水史』鹿島出版会〉

＝週１回掲載

◇

（たけばやし・せいぞう）

1969年京都大学大学院工学研究科修士課程修了、建設省（現国土交通省）入り。近畿地方建設局琵琶湖工事事務所所長、関東地方建設局甲府工事事務所所長、土木研究所ダム部長、同環境部長などを歴任。富士常葉大学名誉教授、風土工学デザイン研究所理事長。主な著書に『環境防災学―災害大国日本を考える文理シナジーの実学―』（技報堂出版）、『ダムと堤防―治水・現場からの検証―』（鹿島出版会）、『風潮に見る風土』（ツーワンライフ）など。